

女子学生 of 精神薄弱児観

— 学習による変化 —

松田 淳之助

はじめに

昭和 48 年 (1973 年) 4 月, 私が本学に赴任して以来毎年, 保育科学生を中心に, 主に新入生を対象にして精神薄弱児 (最近では「精神遅滞児」といわれるようになったが, (本稿では以下「精薄児」と称す) についての意識調査を行ってきた。その結果に分析・考察を加えたものを一度, 本学研究紀要で公けにしたことがある (紀要第 20 号 [1976])。以来十有余年を経過した。その間, 情報化時代を反映してか, 精薄児等障害児者に対する学生たちの認識, 関心, 理解等はたしかに深まりつつあるように見受けられはする。しかし, よく分析してみれば, それはあくまで皮相的, 表面的理解の域を脱しえず, 本質的把握にはほど遠く, 本音の部分ではまだまだ, 誤解や偏見を抱いていると断ぜざるを得ない。こういったことも考えてみれば彼女達はいうに及ばず, 多くの心身障害児者とかかわりなくすごしている人達は受験勉強, 仕事などに毎日追いまくられ, マスコミなどから心身障害児者達に関する情報が彼女達の耳目に達しても, かかわりを抱くだけの心理的余裕すら持ち得ないのが実情ではあるまいか。

心身障害児者への, より本質的理解・把握のためには彼等に関する何らかの学習の機会を与えることが必須であると考え。さいわい, 本学保育科学生は 2 年間に及び講義, 演習, 施設実習等で心身障害児に関する学習の機会がかなり与えられている。そこで本稿では保育科学生にしぼり, 彼女達の本学入学直後 (学習前) と 2 年間の経過直前 (学習後) の 2 回, 同一調査を用いて彼女達の精薄児に対する意識の変化をみてみることにした。あわせて, 学習の方法・内容等についての検討をも加えてみたいとも考えた。

目 的

精薄児についての知識, 理解等が希薄と考えられる本学入学の保育科学生が実際にはどのような精薄児観を

抱いているのか, まずその実態を把握する。その彼女達が 2 年間保育に関するさまざまな学習をしたことによって, 入学当初の精薄児観がどのように変容しているか, そのあり方によっては学習の方法・内容等の検討を試みる必要性も生じるかも知れない。以上のことから, 精薄児に対する関心を高め, より正しく, より深い認識・理解等を抱く方向への変容のための学習のあり方を追究することを本研究の目的とする。

方 法

1. 対象者: 昭和 61 年 4 月, 本学保育科入学生 50 名をその対象とした。
2. 研究方法: アンケート調査法
3. 調査実施時期:
 - 1 回目→昭和 61 年 5 月 8 日 (50 名)
 - 2 回目→昭和 62 年 12 月 18 日 (非履修者・欠席者がいたため対象者は 40 名)
4. 手続き: 1 回目, 2 回目とも同じ質問項目のアンケート用紙を配布, 無記名方式で実施した。

結 果

以上のような方法・手続きによって実施したが, その結果を精薄児への関心度, 知識・理解, 接見の有無とその時の印象, 家族への思い, 心情の 5 つの側面から眺めてみる。

1. 精薄児への関心度

このことについては 4 つの選択肢を用意し, その中の 1 つを選択させた。その結果が表 1 である。すなわち, 入学当初の関心度は「かなり」「多少」をあわせた関心あり群が 64% と全体の $\frac{2}{3}$ を占めている。この数値は 10 余年前の 56.1% より僅かながら増加したものとなっている。

さて, この関心を持つに至った動機・理由についてだが, そのうち「かなりある」7 名についてみると, 3 名はいとこなど身内に精薄児がいて面倒をみた経験

表1 精薄児への関心度

関心度	実施年月		S. 61.5		S. 62.12		S. 61.5		S. 62.12	
	人数・%	人数	%	人数	%	人数	%	あり・なし群の計	あり・なし群の計	
かなりある	7	14.0	13	33.3	} 32名 64.0%	} 38名 97.4%	} 18名 36.0%	} 2名 2.6%		
多少ある	25	50.0	25	64.1						
あまりない	15	30.0	2	2.6						
殆ど(全く)ない	3	6.0	0	0						

がその理由となっているが、残りの4名は精薄児との接触経験はなかったものの、「宮城まり子・灰谷健次郎の本を読んだ」、「いつ自分の周りの人や自分自身がそうなるかわからないから」、「人ごとと考えてはいけなから」など大へん心温かな人間性に根ざしたと思われるものばかりだった。

次に、関心を「多少もっている」25名(50%)についてみると、そのうち、今までに精薄児との接触経験を有するものが7名いた。この7名は「身近かにいたから」、「ボランティア活動で接したから」、「より楽しい生活を送ってほしいから」など接触時期が早かったり、自発的に精薄児の中にとびこむなど、かなりの積極性、能動性がうかがえた。また、接触経験を持たない18名についてみて「保育の道を選んだから」(3名)、「この子らとかかわる職場で働きたい」(2名)などのほか、「新聞、TVなどで彼らが懸命に生きる様子を見たから」(2名)、「こういう子についての知識を得たいから」など、このような理由には、またその背景があるに違いないが、いずれにせよ、肯定的な理由によるものばかりであった。(理由、無記が4名いた)。

一方、無関心群が18名いたが、そのうち、「あまりない」15名については11名が無記。理由を記したのは僅か4名にすぎなかった。そのうちの3名は「そういう子に会ったことがないから」、他の1名は「あまりかかわりたくないという気持ちがあるから」と記している。また、「全く関心がない」も「どう扱えばいいかわからないので」、「接したり、見たことがないから」(この2名は接触経験なし)、残り1名は小学校時代に接触経験があり、その時の印象も「気のやさしい子だった」と記してはいるが、その理由を「考えたことがない」と記し、いずれも否定的、拒否的とも受けとれるような理由づけをしている。

以上が入学当初の関心度及びその理由であるが、それが2年後にはどのように変化したか、それは表1の右欄にみられるように無関心群は「あまりない」の僅

か2名に激減している。当然、有関心群が激増したわけだが、それも「かなりある」が入学当初の2倍強の増加となっている。

このように関心度が「かなり・多少」とも高まった理由としては講義や演習で彼らへの正しい知識・認識を得た、というのも若干みられた(「かなりある」群13名中3名、「多少ある」群25名中4

名)が、その多くは精薄施設・保育所・幼稚園などにおける保育・教育実習での精薄児との接触体験であった。すなわち、彼らと接触したことにより「かなりある」群では「とても素直で何とか力になってあげたいと思った」(4名)、「一度かかわりを持つと中々離れられなくなった」、「精薄施設に就職したい」、「可能性を持っているし、彼らの成長・発達する姿に感動したから」、「いまだに精薄児に対する偏見があり、それを取り除きたいと思うから」「精薄児についてまだまだ知りたい」「かわいいから」(各1名)などと記している。

次に「多少ある」群だが、この群も「かなりある」と同じような理由を記した者が多かった。が、ほかに「人ごとのように思えなくなった」、「放っておけない問題が多いから」、「色々なことを一緒にして喜びを共にしたいから」、「かばってやりたい」、「障害児保育の大切さを認識した」、「精薄児すべてが治癒されればよいと思うから」などなど自分自身が精薄児の立場に立っての、いわば共感的理解を基調としたと思えるような理由を記したものが大多数を占めていた。

2. 精薄児への知識・理解

このことについては特性、原因、出現率、教育的配慮の4つの下位項目を設けてみていくことにする。

(1) 特性:「精薄児とはどんな子だと思うか」という問いに対して自由記述方式で答えてもらった。その結果をまず、入学当初の場合からみていくことにする。

(a) 「かなり関心がある」7名。

「判断や思考能力が年令の割に劣っている子」(2名)、あとは各1名で「精神に障害をもつ子」、「脳に何らかの障害をもつ子」、「自分で考えたりできない子」、「勉強の出来、不出来より社会に対応できない子」と大体、知能に何らかの障害をもつ者を想定していると考えられるような記述だったが、1名「将来、色々な可能性や感動を秘めている子」と精薄児に対する従来の恒久性を否定し、将来への可塑性、人間性の肯定を示唆するような回答をした者がいた。

(b) 「多少関心がある」 25名

「知能が年齢のわりに低い、又は遅れている子」と、ずばり知能遅滞を指摘した者が12名いたほか「精神的発達遅滞があり、社会生活に適応できない子」、「心身に障害があり、年齢相応の能力をもたない子」、「知能が低く、体の不自由な子」、「知能は遅れているが、けがれのない素直な子」、「脳の障害のため、普通の生活を1人で営むことができない子」など知能遅滞を指摘したものが多かったが、「何かにおびえ、身体に故障がでて不自由な毎日を送り、閉鎖的となり、そのため治療しにくい子」や、「まわりの子達にとけこめず、自閉的になってしまっている子」などややまとはずれ的な回答もみられた。

(c) 「あまり関心がない」 15名

この、「やゝ無関心」群も、「知能が普通児、同年齢児より遅れている子」(6名)や、「脳に障害、あるいは、脳の発達が不十分な子」、「IQが異常に少ない子」、「普通児にくらべ、考えることや物を言うことが不自由な子」などその表現に若干、拙劣さがみられなくはないが、おおむね、知能の遅れ、障害を指摘したものがほとんどだった。が、例外的なものとして「身体に障害をもち、心身共に弱っている子」と身体障害児と混同したもの、「とがった物をみると、こわがったり、針をみると飲みたがったりする子」と異常性格児と混同している者がいた。

(d) 「全く関心がない」 3名

この3名はそれぞれ、「普通児より考える力がない子」、「脳の発達が遅れ、自分の思い通りに行動できず、常に他人の世話が必要な子」、「とても気がやさしくて他人に対しても思いやりがあり、素直な子」と、前2名は全く無関心ながら、的に近い回答をしている。また、あとの1名は自分の接触経験からの感じを記述している。

全体的にみると、全くの見当はずれ的な回答はほとんどみられず、大体、当を得たものか、それに近いものが大多数を占めていた。

次に、彼らの特性について、2年後の回答をみてみよう。

(a) 「かなり関心がある」 13名

さすがに、2年間の学習経験、施設実習等での接触経験を積んだあとだけに、ほとんど全員がIQ70~75以下の知能遅滞、社会適応行動障害を指摘している外、ダウン症は「愛嬌があり可愛い、興味の変動が激しいが、集中する子もいた」、また、「素直な子も多かった」など、自分の接触経験からの具体的特性も

多くみられた。が、中には、たゞ「IQ70以下」、とか「IQ70以下でMAがCAに比し遅れている」など皮相的の把握にとどまっている者も2名ほどみられた。

(b) 「多少関心がある」 25名

この25名の回答も上述の「かなり関心あり」群と大体同じようなものだった。この中で多くみられたのは、「普通児より知能、またはIQが低下している子」(7名)というものだった。ほかに、「IQが極端に低い子」、「知能が低く、虚弱な子」、「かわいそう」など2年間学習したあとにしては首をかしげたくなくなるようなものもみられた。

(c) 「あまり関心がない」 2名

無関心群はわずか2名しかいなかったが、そのうち1名は無記、回答した1名も「頭の弱い子」としか記しておらず、まさに無関心さを象徴するような回答であった。

以上、2年間の諸学習を経たあとの精薄児の特性については、皮相的、表面的の把握にとどまった者が若干あったにもせよ、その多くはより正しい、より近い把握をしたものとなっていた。

(2) 原因、「精薄児となる原因は何だと思うか」という問いに6つの選択肢を設け、その中からいくつでも該当すると思うものをチェックさせた。その結果が表2である。この表によると、入学当初では「何らかの外的要因による」が34.0%で最も多く、「わからない」が24.0%と2番目に多い。以下、「遺伝と外的要因」が16.0%で3位、「感染と外的要因」が8.0%で4位、遺伝が6.0%で5位となっている。これを関心の有無別にみると、「何らかの外的要因」は有関心群が無関心群の約2倍もいた。が、その具体的内容については両群とも薬害がそれぞれ7名づつと最も多く、以下、出産障害、交通事故、突然変異によるなどがみられたが、有関心群の中に火災、幼児期に恐ろしい経験をして、などの外的な記述もみられた。次に、「遺伝と外的要因」は逆に無関心群が多数を占めた。

以上が入学当初の結果だが、さて2年後はどのような変化がみられるか、その結果は表2の右欄にみられるとおりである。すなわち、その6割の者が「遺伝と外的要因」をその原因とする、と正しい把握をしている。また、外因だけと扱えた者も2割、遺伝が1割と、おおむね正確な把握に近いものとなっており、的外れな回答をした者は皆無となっている。これはまさに学習効果のあらわれとみてよいように思われる。

表2 精薄児の原因

項目	実施年月		S.61.5 (50名)						S.62.12 (40名)					
	関心別		あり群 (32名)		なし群 (18名)		計 (50名)		あり群 (38名)		なし群 (2名)		計 (40名)	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
1. 遺伝による	2	6.3	1	5.6	3	6.0	3	7.9	1	50.0	4	10.0		
2. 流感のように感染による	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
3. 先祖からの血統による	0	0	1	5.6	1	2.0	0	0	0	0	0	0		
4. 何らかの外的要因による	13	40.6	4	22.2	17	34.0	7	18.4	1	50.0	8	20.0		
5. わからない	8	25.0	4	22.2	12	24.0	3	7.9	0	0	3	7.5		
6. その他	0	0	1	5.6	1	2.0	0	0	0	0	0	0		
1 + 2	1	3.1	0	0	1	2.0	0	0	0	0	0	0		
1 + 4	2	6.3	6	33.3	8	16.0	24	63.2	0	0	24	60.0		
2 + 4	4	12.5	0	0	4	8.0	0	0	0	0	0	0		
1 + 2 + 4	0	0	0	0	0	0	1	2.6	0	0	1	2.5		
1 + 3 + 4	1	3.1	0	0	1	2.0	0	0	0	0	0	0		
2 + 3 + 4	0	0	1	5.6	1	2.0	0	0	0	0	0	0		
1 + 2 + 3 + 4	1	3.1	0	0	1	2.0	0	0	0	0	0	0		

(3) 出現率：次に出現率について、「出現率ほどの位だと思いか」という問いに対して「1万人に1人位」から「10人に1人位」まで、それに「わからない」を加え、8つの選択肢を設け、その中から1つを選択させた。その結果が表3である。

まず、入学当初についてみると、最も多かったのが「100人に1人位」の30%、ついで「50人に1人位」の22%、「500人に1人位」の16%などとなっている。この質問の正解は、多少なりとも何らかの学習をした者でなければ困難で、漠然とした知識や大体的見当だけでは正解は得られにくいにもかかわらず、

5割以上の者が正解あるいはそれに近いところに回答していた。この数値は10余年前の2割弱と較べても2倍以上の激増となっている。この出現率については有関心群、無関心群との間に大きな差異はみられなかった。

次に、2年後の変化をみると、表3の右欄に示したように、正解の「50人に1人位」が57.5%と入学当初の3倍弱と激増し、それに近い「100人に1人位」の15%を合わせると7割強を占めている。だがしかし、「1,000人に1人以上」と答えた者が7名、2割弱いた事実をどう解釈したらよいのか、考察に値いするところであろう。

表3 精薄児の出現率

項目	実施年月		S.61.5						S.62.12					
	関心別		あり群		なし群		計		あり群		なし群		計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
1. 1万人に1人位	3	9.4	1	5.6	4	8.0	1	2.6	1	50.0	2	5.0		
2. 5,000人に1人位	3	9.4	3	16.7	6	12.0	2	5.3	0	0	2	5.0		
3. 1,000人に1人位	4	12.5	2	11.1	6	12.0	3	7.9	0	0	3	7.5		
4. 500人に1人位	5	15.6	3	16.7	8	16.0	3	7.9	0	0	3	7.5		
5. 100人に1人位	10	31.3	5	27.8	15	30.0	5	13.2	1	50.0	6	15.0		
6. 50人に1人位	7	21.9	4	22.2	11	22.0	23	60.5	0	0	23	57.5		
7. 10人に1人位	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
8. わからない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
無記	0	0	0	0	0	0	1	2.6	0	0	1	2.5		

(4) 教育的配慮：精薄児が、いわゆる「ちえ遅れの子」であるということは、先の特性の回答から、多くの学生がより正しい理解をしているものと考えられる。では、このような精薄児に対してどんな教育的配慮をすべきか。そのことについての質問をした。具体的には次の6つの問いの中から1つを選択させた。

- ① 健常児と一緒に教育を受けさせるのがよい。
- ② 精薄児だけの集団による教育がよい

③ 通常は精薄児だけ、時によって健常児と一緒に教育がよい。

④ 一般市中にいるのは不安なので、どこか離れた所に収容するのがよい。

⑤ その他

⑥ わからない

この質問に対する回答は表4に示したとおりである。

表4 精薄児への教育的配慮

項目	実施年月		S.61.5						S.62.12					
	関心別		あり群		なし群		計		あり群		なし群		計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
1. 健常児と一緒に教育がよい	6	18.8	1	5.6	7	14.0	11	28.9	0	0	11	27.5		
2. 精薄児だけの集団による教育がよい	5	15.6	0	0	5	10.0	0	0	0	0	0	0		
3. 通常は精薄児だけ、時により健常児と一緒に	18	56.3	16	88.9	34	68.0	25	65.8	2	100.0	27	67.5		
4. 一般市中は不安、遠くへ収容がよい	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
5. その他	0	0	0	0	0	0	1	2.6	0	0	1	2.5		
6. わからない	2	0	1	5.6	3	6.0	0	0	0	0	0	0		
7. 1 + 3	1	3.1	0	0	1	2.0	1	2.6	0	0	1	2.5		

まず、入学当初の結果(表4, 左欄)をみると「通常は精薄児だけ、時により健常児と一緒に教育がよい」とするものが7割弱もの多数を占め、それも無関心群が9割弱もいた。これは、精薄児についての関心はなくても彼らへの教育的配慮についての判断は適確、妥当なものであり、関心度とはあまり関係がないことを示唆しているといえよう。ついで、「健常児と一緒に教育がよい」、「精薄児だけの集団による教育がよい」がそれぞれ14.0%、10.0%となっている。前者は、いわゆる、統合保育を指し、後者は分離保育のことで両者とも有関心群が多数を占めている。特に、後者については、無関心群は皆無だった。この「精薄児だけの教育云々」は、10余年前の調査時点では66.7%もいたが、その後急速に統合保育・交流保育がすすめられ、それがマスコミなどを通して新入生の中にも浸透してきたのではないかと考えられる。

それが、2年間の学習後の調査では表4の右欄で明らかのように、分離教育をあげた者は皆無となり、 $\frac{3}{4}$ 弱は交流教育、 $\frac{1}{4}$ 強が統合教育が望ましいと、大きな変容をみせている。ここにも、学習経験の影響の大きさを物語る結果がえられたといえよう。

3. 接見の有無とその時の印象

本学入学までに、精薄児に接したことがあるかない

か、その有無についての質問をした。その結果、全体的にみると「あり」は13名26.0%にすぎなかった。それを関心の有無別にみると、「かなりある」3名(23.1%)、「多少ある」7名(53.8%)「あまりない」2名(15.4%)、「全くない」1名(7.7%)と、接見の有無が関心度にかかりの影響を与えていることを示唆する結果となっている。

次に、その時の印象について、関心度別にみても、関心度の高い3名は「純粋な心をもってと思った」「いつもここにこして私は好きだった」、「とても人数の多いのに驚いた」と最後の1名は精薄施設に見学にも行ったのか、その辺のところはよく判らないが、あと2名は好意的な受けとめ方をしている。次に、関心「多少あり」の7名についてみると、「かわいい」、「不思議な子だなあ」が各1名、「かわいそう」が2名、「いやな子とは思わなかった」も2名と不快感、否定的な受けとめ方をした者は非常に少なかった。最後に無関心群についてみると、接触した者は18名中僅か3名しかいなかったが、その3名はまさに3者3様「かわいそう」、「別に何とも思わず」、「とても気のやさしい子だった」と回答している。いづれにせよ、10余年前の調査の時の「恐れ、気持ちが悪かった、不安、異様、驚き」などのような不快感を

抱いた者は激減（10余年前37.0%，今回8%）し、同情的、好感的印象を持った者が大へん多い結果となっている。

4. 精薄児をもつ家族への思い

受験戦争、受験地獄といわれるような昨今、普通児といわれる子を持つ親でも神経をとがらせ、ピリピリしているというのに、人なみについていけるかどうか

さえ危限される精薄児をかかえる両親、家族は一体どんな思いをしているのだろうか。そのあたりを推察してもらうための質問を試みた。この質問については1966年に阪神間の女子大生を対象に調査した伊藤隆二・田川元康ら¹⁾の調査と比較する意味で表5のような5つの選択肢を設けて回答を求めた。

表5 家族への思い

項目	実施年月		S.61.5				S.62.12					
	関心別		あり群		なし群		あり群		なし群		計	
	人数・%		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
1. 何とか励ましてあげたい	24	75.0	4	22.2	28	56.0	32	84.2	0	0	32	80.0
2. 考えたことがない	4	12.5	10	55.6	14	28.0	0	0	2	100.0	2	5.0
3. 自分がかかわりたくない	0	0	1	5.6	1	2.0	0	0	0	0	0	0
4. その家族で責任を持つべきだ	0	0	1	5.6	1	2.0	0	0	0	0	0	0
5. その他	3	9.4	2	11.1	5	10.0	5	13.2	0	0	5	12.5
1 + 4	1	3.1	0	0	1	2.0	1	2.6	0	0	1	2.5

その結果、表5の左欄にみられるように、入学当初において過半数の者が「何とか励ましてあげたい」と回答しており、それも有関心群が無関心群の4名（22.2%）に対し、24名（75.0%）と大多数を占めている。また、「考えたことがない」、「自分がかかわりたくない」と答えた者がそれぞれ28.0%、2.0%と両者あわせて30%を占めているが、その多くは無関心群（あわせて61.2%）であった。この、冷酷、無情とも思えるような気持を抱く者は1966年の伊藤らの調査の33.7%の2倍近くにも達しており、家族への思いは関心の有無が大きく左右した結果になったといえよう。

ところで、最も多く全体で56%を占めた「何とか励ましてあげたい」について、更に、より具体的にはどのような励ましをしたいか、それを問うてみた。その結果を、精薄児への関心の有無・度合い別に述べていくことにする。

「関心大いにあり」群、5名。そのうち、無記が2名、記述した3名もそれぞれ、「一緒に世話をやりたい」、「私のできることをしたい」、「私は味方、と励ましてやりたい」など、具体性に欠ける記述ばかりだった。

「関心多少あり」群、19名。そのうち、無記4名、「わからない」が2名、記述したものの「励ましてあげたい」、「何とか協力してあげたい」など具体性を欠くものが多数を占め（10名）、具体的記述と思われるものは「ボランティア活動をもつと活発にしたい」

の2名と、「施設訪問をより多くしたい」の1名、計3名にすぎなかった。

最後に「無関心群」4名（4名とも、「あまり関心なし」）。無記が1名いたが、あとの3名はそれぞれ「話し相手になってあげる」、「何事にも負けず頑張ってください」、「何か手助けできればそうしたい」と、これまた、具体性を欠いたもの、励ましにはなっていないような記述ばかりだった。

以上、その多くは「何とか励ましてあげたい」気持ちは持っているものの、もう一步、具体的なところまで何かをという積極性に欠けるものが、関心の有無にかかわらず、多数を占める結果となっている。

この外、「その他」が5名いたが、その内容をみると有関心の3名については「ボランティアグループには行って活動したい」、「家でも施設でも、その子に一番よい方法をとって生活させてほしい」、「何もできないので原因究明・治療法など研究したい」などより具体的な記述のものがみられた。また、無関心の2名は「大変だろうなあとと思う」、「特別視せず、温かく見守りたい」と無関心ながら同情的気持ちのにじみ出た家族観だった。

次に、2年後の家族への思いについてみると、表5の右欄に示したように「何とか励ましてあげたい」とする者が80%と大多数を占める結果となった。この回答者たちへも具体的な励まし方について問うてみた。その結果も関心の有無・度合い別に記す。

「関心大いにあり」群, 11名。そのうち, 無記が4名と「社会的援助などの充実を図るべき」, 「普通に接することが大切だし, 自分のできることはやりたい」など具体性の希薄な者が2名いたが, 他の5名は「相談・悩みを聞く」, 「よく話しあう」, 「地域活動への積極的参加を促す」など, かなり具体性のある回答であった。

「関心多少あり」群, 21名。この群も無記が7名と多く, 「親がしっかりした気持ちで子どもを受けとめ育ててほしい」, 「社会全体で温かく見守り, 接するべき」など, 具体的励ましになっていないもの, 「理解してあげたい」, 「もっとふれあう機会がほしい」など希薄なものが多かった。だが「しっかり社会(地域)活動への参加をすすめる」, 「しっかりお手伝いをしたい」(4名), 「ボランティアとしての活動をする」など6名ほどに具体性の明確な者がいた。

以上, 励ましについての具体的内容の結果をのべたが, その外の結果について, 表の1と4にチェックした者がいた。この者は「偏見を持たず, 普通児と同じように接し, 温い目でみたい」と家族の責任を基本とするが, そのような家族への温かさ, 好意的態度は十分に抱いている回答であった。

その外に「その他」が5名いたが, そのうちの2名は無記, 3名は「福祉活動などに家族ぐるみで参加し,

精薄家庭間の交流を深めてほしい」, 「せめて話し相手, 遊び相手になれたらよい, あつかましくない程度のことをしたい」など好意的, 温情的, そして謙虚さをもちあわせた回答だった。

以上はすべて有関心群の結果だったが, 無関心群2名はいずれも「考えたことがない」だった。

5. 精薄児への心情

精薄児への心情については, 前述した「精薄児との接見時の印象」, 「精薄児をかかえた家族への思い」などに関する質問である程度はうかがい知ることができた。しかし, これらは対象者自身との直接的かかわりに乏しく, 自分自身の切実な問題として受けとめるような設問ではなかった。そこで, 精薄児との距離をちぢめ, 何らかのかかわりを持ち, より切実感を抱かせるような場面, 事態に直面すれば, より真実に近い心情が吐露されるであろうとの思いから, 次の2つの質問を用意した。

すなわち, その1つは「あなたに弟妹がいるとすれば, その弟妹を精薄児と一緒に遊ばせたり, 席を並ばせたりしたくないですか」という設問, もう1つは, 女子学生自身に直接かかわる結婚に関するもので「あなたの縁談の相手の兄弟姉妹に精薄児がいるとわかったらどうしますか」という設問である。これらの結果はそれぞれ表6, 表7に示した。

表6 弟妹との接触

項目	実施年月		S.61.5						S.62.12					
	関心の有無		あり群		なし群		計		あり群		なし群		計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
1. 精薄児と接触させたくない	0	0	1	5.6	1	2.0	1	2.6	0	0	1	2.5		
2. 精薄児と接触させてもよい	22	68.8	8	44.4	30	60.0	31	81.6	0	0	31	77.5		
3. どちらともいえない	9	28.1	5	27.8	14	28.0	5	13.2	2	100.0	7	17.5		
4. わかからない	1	3.1	4	22.2	5	10.0	1	2.6	0	0	1	2.5		

表7 結婚相手の兄弟姉妹に精薄児がいる場合

項目	実施年月		S.61.5						S.62.12					
	関心別		あり群		なし群		計		あり群		なし群		計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
1. 絶対にその縁談を断わる	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
2. どちらかといえば避けたい	5	15.6	1	5.6	6	12.0	9	23.7	1	50.0	10	25.0		
3. 相手が気に入った人であれば, 問題にしない	24	75.0	14	77.8	38	76.0	23	60.5	1	50.0	24	60.0		
4. その他の	3	9.4	3	16.7	6	12.0	5	13.2	0	0	5	12.5		
無記	0	0	0	0	0	0	1	2.6	0	0	1	2.5		

まず、「弟妹と精薄児との接触」について入学当初（表6左欄）の方からみていくことにする。

この表6から「接触させてもよい」とする者は全体的には60%に達しているが、有関心群と無関心群との間に大きな差異がみられる。すなわち、前者は7割弱もいたのに対し、後者は4割強しかいない。この数値は1961の全日本特殊教育研究連盟²⁾の調査結果40%、筆者の10余年前の本学学生を対象とした調査結果43%とほとんど同じ結果となっている。また、「接触させたくない」と積極的に拒否した者は無関心群において僅か1名、率にして5.6%と全日本特殊教育研究連盟の30%、10余年前の本学学生の9.4%よりかなり少ない結果とはなったが、「どちらともいえない」、「わからない」とするものがあわせて5割にも達しており、消極的拒否をおおわせるか、弟妹との接触のためらい、躊躇する者が多い結果となった。この、弟妹との接触については、関心の有無と大いに関係がありそうな結果になったものといえよう。

次に、2年後の結果をみてみよう。表6の右欄に示したように無関心群は2名とも「どちらともいえない」と相変わらず、とまどい的回答をしている。それに対し、有関心群は「接触可」が8割を越え、「どちらともいえない」、「わからない」が16%弱と入学当初の半分以下に減少している。が、入学当初にみられなかった「接触不可」が1名あらわれた。なぜか、この表からだけでは明確な理由は見出せない。

さて、次の「縁談相手云々」についてみていきたい。この設問については表7にみられるように4つの選択肢を設け、それぞれ、その理由も記してもらったことにした。

まず、入学当初の結果について。「絶対に断わる」とした者は両関心群とも皆無だったが、「どちらかといえば避けたい」が全体では1割強だった。が、これは有関心群に多くみられた。圧倒的に多かったのが「相手さえよければ問題にしない」で有関心群と無関心群との間に大きな差はなかった。では「避けたい」、「問題にしない」それぞれの理由についてみると、前者については、無記が2名いたが、記述されたものでは「両親に反対されると思うから」、「子供に精薄児が生れるかも知れず、こわいから」のほか「別に理由はない」と理由なき拒否もみられた。やはり、漠然とした不安がその根底にあるのかも知れない。

後者については、「相手本人と結婚するのだから別に問題にしない」というのが最も多く16名と半数近くいた。その外の理由も「遺伝ではないと思うので」や

「家族とは関係ない」、「誰も悪くない」、「個人個人1人の人間だから」など個の独自性がその根幹にみられると思うものや「もっと精薄児のことがわかってくると思うから」、「精薄児を支えるには1人でも多くの人が助けあう方がよいと思うから」、「精薄児だからといって差別される理由はない」など、むしろ、精薄児のため、自己成長にもつなげたいことを示唆するような理由もみられた。なお、無記が12名もいたことが気になるが、これらは、本人さえよければ精薄児がよいがいがいが、そんなことは眼中にない、記述するほどのことでもない、と考えてのことなのだろうか。

以上が入学当初の結果だが、この結果が2年後にはどのように変容したか、それは、表7の右欄に示したように「問題にしない」が16%ほど減少し、逆に「避けたい」が25%と倍以上の増加をみせている。まず、このように答えた理由をただしてみる。

前者、「問題にしない」と回答した24名のうち9名が無記だった。残り15名の回答のうち、最も多かったのは「関係ない」の5名につづき、「避ける要なし」の4名だった。その他、「結婚する相手自身が大切」、「その人との間に精薄児が生れても自分たちの子、一緒に育てていけばよい」、「その人も、兄弟に精薄児がいることによって苦勞していると思うから、精神的に強くなっていると思う」など、相手の人間性を高く評価したと考えられる理由と、自分自身が「精薄児がよくわかり、嫌と思わなくなった」、と精薄そのものへの好意的見解と思える理由がみられた。

ところで、倍増した「避けたい」の理由で最も多かったのは「遺伝するかも知れない」（4名）だった。あとは「頭では理解できても実際問題、それに対応できるだけの自分の姿勢をもちえないから」という、謙虚な気持ちと思える理由、「両親などが反対しそう」というものの外、「なんとなく」と漠然とした不安を抱いた記述があった。

その他、「その他」が5名いたが、この5名のうち3名は「その時になってみないとわからない」と記述、あとは、それぞれ「家族が反対するかも」、「その精薄児の精薄原因によって考える」という記述であった。

考察 および まとめ

精薄児・者の福祉については、近年、彼らに対する諸法律の整備、行政の積極的取り組み、などによりかなり、向上、充実して来つつあるように思える。しかし、全体的・総合的にみるならば、まだまだ、決して十分なものになっているとはいえない。そうさせる、

一番の土台・根幹となるものは、何といっても一般市民の理解・好意的態度・意識、それぞれに基づく大きな支え、援助・協力などであろう。これがなくては、精薄児・者の福祉の向上は望むべくもない。

このような観点から、一般市民の精薄児・者に対する理解・関心・態度などを探るべく、その一端をみるため、更には、ある程度の学習を積むことにより、それらがどのように変容するか、より正しく、深い方向に持っていくすためにはどのような教育をすすめていくべきかなどを探るため、本学学生を対象に入学当初と卒業前の2回調査をした。その結果を表に示し、若干の解釈を加えてみた。が、ここで、その結果をもとに今すこしくわしく考察してみたい。考察は項目別にしてみることにする。

1. 精薄児への関心度

精薄児への関心は表1に示すような結果となり、関心の有無それぞれの理由・動機等についても「結果」のところでも述べたとおりである。やはり、関心の有無を大きく左右するものは講義やテキストなど抽象的傾向の強いものよりも、テレビ・新聞などの情報、文学作品、見学・実習等による彼らとの直接接経験など、より具体的経験の有無・多少等であることが明白となった。現に、入学当初無関心だった者の理由について「出会ったことがない」というのが若干みられた。そのほか、「あまり、かかわりたくない」や無記が15名中11名もみられたことは彼女たちの過去18年の間に誤った情報、無知にもとづく偏見などにより、正しからざる精薄児観を大なり小なり持つに至ったからではなかろうか。ともあれ、誤まった精薄児観を持ったかも知れない彼女たちも、2年間の具体的・直接的経験を重ねた結果、大多数の者が関心を持つに至っている。このことから、関心をより高めるためには何といっても精薄児との接触の機会をより多く与えると共に、正しい情報・知識を提供することであろう。

関心の強弱は単にそれのみに留まらず、精薄児に対する知識・理解・心情等のあり方にも大きく左右するものである。現に、2年後の調査で「関心あまりない」と答えた2名は、「精薄児とは」の質問に対して1名は「頭の弱い子」と記したが、もう1名は無記、「出現率」も1万人に1人と100人に1人、「家族への思い」は2名とも「考えたことがない」、「弟妹との接触」も2名とも「どちらともいえない」など正しい知識・理解はしておらず、心情等も拒否的、偏見視、蔑視的態度を抱くなど、かなり偏った精薄児観を持っているようである。このことからみても、一般市民が1人でも

多く関心を高める、ということは非常に大切なことといえよう。

2. 精薄児への知識・理解

精薄児の知識を先の「結果」と同じく、特性、原因、出現率、教育的配慮の4つの下位項目別に考えていく。

(1) 特性：このことについては「結果」のところで述べたように、入学当初においても関心の有無にかかわらず、見当はずれな把握をしている者は少なかった。が、よくみれば、それは表面的・皮相的な把握にとどまっていた。それが、2年後では無関心の2名は前述のとおりだが、あとの有関心者は先の表面的・皮相的把握から、かなりの者が本質的・具体的把握へと変化した。このことは、講義・実習等による学習効果によるものが大きいと考えてよいだろう。勿論、それだけではなく、それらによる関心の高まりから、精薄児に関する情報等もより積極的・能動的に取り入れたことによるものもあるだろう。

より正しい特性把握のためにもテキストなどで「精薄児の定義・概念」をいわゆる暗記させるにとどまらず、精薄児とのかかわりを持たせるなど具体的・直接的体験学習を積み重ねさせる（そのことにより、関心度も高まっていくことは前述したとおり）ことが何よりも肝要のことと考える。

(2) 原因・出現率：この2つについての正確な知識は、多少なりとも何らかの学習をした者でなければ持ちえないもので、おおまかな見当や勘にたよるような性質のものではない。にもかゝらず、入学当初における正解者、あるいはそれに近い者が両者とも半数前後にも達していた。ということは、受験勉強1本と考えられやすい高校時代、あるいは中学時代に何らかの教科で学習する機会があったのだろうか。筆者の10余年前の調査より正解者が大幅に増加しているところから、学校教育以外、新聞・テレビなどの情報から得たものなのだろうか。そのあたりのところを確認しておくべきだった。

2年後は当然といえば当然だが両者とも正解が70～80%に達している。その中において「原因」では、「遺伝」、「わからない」とする者がそれぞれ、10%、7.5%、「出現率」では「1万人に1人」と答えた2名を含め、「500人に1人」以上と答えた者があわせて25%もいた。このうち、「1万人に1人」と答えた無関心の1名以外はすべて有関心者である。更に、全員が精薄児についての学習を演習科目として履修した者たちばかりである。だから、かりに正解を忘れたとしても設問を目にした時、その当座の判断で正解に近

い箇所にチェックできそうに思われる。にもかかわらず、ひどい誤答をした、ということは何のように解釈したらよいのであろうか。それこそ、今後の検討課題にしなければならないところである。

(3) 教育的配慮：精薄児の教育については、以前の閉鎖的・分離（隔離）的教育に批判が加えられ、それに代ってノーマライゼーションが叫ばれはじめ、精薄児教育も統合教（保）育、交流教（保）育が急速に導入されるようになってきた。そこで本調査では、本学学生達がどのような教育形態・配慮を望ましいと考えているかをみるために以上のような教育形態を設問として並べてみた。すると入学当初は交流教育が68%と最も多く、あと、統合教育が14%、分離教育が10%にとどまったほか、「わからない」が6%みられた。分離教育は「結果」のところでも述べたように、10余年前の調査では66.7%と多数を占めていた。10余年の間にこのような激減となったことは、先のノーマライゼーション、それにインテグレーションなどが新聞・テレビなどマスコミにも大きく、そして何度も何度も取りあげられ、彼女たちの耳目にも達する機会が幾度かあったことによるものであろうと考えられる。また、面白いことに、この分離教育がよいとする者は「有関心」群が15.6%いたのに対し「無関心」群は皆無だった。逆に、交流教育をよしとする者は「有関心」群より「無関心」群の方が多く結果となった。このような結果をどのように解釈したらよいのか、たゞ、教育的配慮は精薄児の特性さえ、より十分に把握しておけばよいもので、関心の有無とはあまり関係ないものであるとする一義的解釈だけではすまされないものが含まれているようである。故に、このことも、今後の検討課題として十分な考察を加えるに値するものであろう。

2年後の結果については、表4の右欄をもとに前述したが、交流教育を是とする者は入学当初とあまり変化はなかったが、統合教育は倍増、分離教育は皆無となった。そして、「わからない」も皆無となっている。このような望ましい方向への変化の最大の要因を考えられるものは何といても諸実習経験であろう。なぜならば、最近、幼稚園・保育園の多くは精薄児を主とする諸障害児が通園しており、その様子を学生たちは目のあたりにしたからであろう。やはり、今までにも何度もふれたように、精薄児など諸障害児とのふれあいの機会をより多く持つことが、彼らへの理解を深め、より望ましい精薄児観を持ち、ひいてはよりよい教育的配慮にもつながっていくものと

考える。

3. 接見の有無とその時の印象

高校までに精薄児との接触経験をもった者は約 $\frac{1}{4}$ ほどしかいなかったが、経験者の多くは有関心者で、接見の有無が関心度にかかりの影響を与えることを示唆する結果となったことは前述のとおりである。

また、接見時の印象も関心の有無にかかわらず、同情・好意・好感的傾向を持った者が多かった。この印象は10余年前と大きな違いがみられた。すなわち、10余年前は恐れ、驚き、異様、不安など不快感を抱いた者が37%もいたのに、今回は僅か8%と激減している。この不快感激減、好感的印象の激増という変化の要因として考えられることは、この10余年の間に精薄児など諸障害児が「国際障害者年」がつくられて全国的キャンペーン、行事が行われたり、それを機に、情報がより多く流されるなどして、彼女達の中に徐々に、予備知識的、好意的イメージが浸透した結果ではなからうか。

やはり、特殊な例を除けば高校時代までに精薄児と接する機会は少ないであろうと考えられるだけに、彼女達及び一般市民に精薄児などへのよいイメージを持たせるための機会をより多く持つことが肝要であろうと考える。

4. 精薄児をもつ家族への思い

この結果については表5に示し、より具体内容についても「結果」のところでも述べたとおりで、結論的には、家族への思いと関心の有無との間に密接な関係のあることが明らかとなった。このことから、家族に対する好意的・援助的・包容的気持ちの増大のためには人格的特性から、はなはだ困難な者もいようが、関心度を高めることが先決といえよう。特に無関心者の有関心への転換のさせ方に大きな意を払う必要性が急務ともいえる。それには、まず、無関心の原因を究明するところから手をつけるべきかも知れない。わが国における現代的風潮として大きく問題視されている「エゴ的傾向」を根強く、その根底に持つ者もいよう。あるいは、受験勉強一筋で、それ以外への興味・関心を抱く心理的余裕すら持ちえない者もいよう。なにはともあれ、原因の究明が急がれるところではある。

いま1つ、入学当初でも過半数、2年後には80%にも達した「何とか励ましてあげたい」が諸学習効果の故か20%以上も増加したことは結構といいたいところだが、その具体性については甚だお寒い結果であるといわざるを得ない、入学当初はともかく、2年後にはもっと中味の濃い内容のものがあるべきと思

ったが、期待外れに終わった。そのような内容にするための教育のあり方等、これも今後課せられた大きな検討課題といえよう。

5. 精薄児への心情

心情については前述のように「弟妹との接触」、「結婚相手云々」の2つの問いからみたが、その結果については表6、表7に示し、「結果」のところ述べたとおりである。すなわち、前者については、結論的には関心の有無と大いに関係があるが、後者は関心の有無よりも、精薄児についての知識・理解のあり方が左右しているといえるようだ。

前者については、関心の有無との関連性が高いので、関心度を高めることにより否定的気持ちは減少するであろう。したがって、関心度を高めさせることが先決であり、そのことについては今までにも折にふれ述べてきたので、ここではふれないことにする。

問題は「結婚相手云々」についてである。入学当初は、「相手さえよければ問題にしない」のが76%もいたのに2年後は60%と16%も減少し、逆に「どちらかといえば避けたい」が倍増しているのである。入学当初は年齢も若く、結婚などというものはまだ遠い先の話として、同情的、好意的な心情から仮定上のこととして受けとったものではあるまいか。それが、2年を経過し、結婚も手の届くところに近づいてきた。更には、短大生活2年間で精薄児に関する学習を理論面、実際面で学んできた。その結果、たてまえとしては十分理解しうる心情を持ちえたものの、精薄児となる原因やその症状、親なきあとの彼らの一生などつらづら考えが広がるにつれ、やはり、「君子、危うきに近よらず」といったような本音が頭をもたげ、「できれば避けたい」気持ちにさせたのではなからうか。その根拠は推測の域を出ないが、ともあれ、頭では好意的態度で受けとめようと、また、心情的にも同情的把握をしているようだが、これらは表面的、たてまえ的なものにすぎず、自分自身とのかかわりが濃くなるにつれ、抵抗感が増大し、本音が表面化し、「避けたい」気持ちが頭をもた

げてくる、という理くつでは割り切れない複雑な心情を強く抱いているように思われる。

以上、各項目別に、調査結果をもとに入学当初と精薄児についての講義・演習・実習等の学習を終えた後の変化についてその実態をふまえての、考察を加えた。いま、それを要約すれば、大きな誤りはなかったものの、おおむね、皮相的、表面的理解、把握にとどまり、心情的にも、好意・好感的態度をもっている一見、受けとられるようだが、自分との距離が接近するにつれ、それは減少していくという、建前と本音の使いわけが明確化していったようで、人間尊重、人間平等感もいまだしの感がぬぐいきれてないように感じられてならなかった。

学歴重視、知育偏重の根強いわが国において、人間尊重、人間平等感をもつことは至難のことなのだろうか。ましてや、心身に障害をもつ子への正しい理解などは……？

精薄児など心身に障害をもつ子への偏見、蔑視、差別視、白眼視などを一掃し、学歴重視、知育偏重を一笑し、人間尊重、人間平等感を高めるためにも教育・行政・福祉などの真剣な取り組みは勿論のこと、幼少時より、そのような子との接触の機会を出来る限り多く持たせるよう配慮すること、親など、大人が子どもに、また、関係機関が一般市民に正しい情報を頻繁に伝達し、知識の供給を図ること、などが急務と考える。

以上、本学保育科学生を対象に、入学当初と卒業前の2回にわたり、彼女たちの抱く精薄児観を調査、学習後の変容ぶりなどについての若干の考察を試みたが、なにしろ、対象者も少なく、保育の道を志ざした者たちだけなので、一般市民とのずれは否定できない。したがって、これらの結果も、その片鱗をのぞかせた程度のものであったかも知れない。今後は、より対象者の幅・数を広げ、表題について更に探究していきたいと考えている。

参 考 文 献

- 1) 伊藤隆二・田川元康 心身障害児に対する社会人の態度(偏見)に関する研究 特殊教育学研究 第5巻1号 1967
- 2) 全日本特殊教育研究連盟 精神薄弱者に対する意識調査の報告 精神薄弱児研究 41号 1962
- 3) 松田淳之助 女子短大生の精神薄弱児観 岡山県立短期大学研究紀要 第20号 (1976)

昭和63年3月20日受理